

北地域後援会は我孫子1～4・久寺家・台田・つくし野・並木・根戸・布施のエリア

くつしけん
藕糸蓮



しらかば北

発行責任者
井上文夫

「市議選勝利の集い」開かる 船橋まさるさん 決意表明!



6月24日、日本共産党我孫子市委員会と各地域後援会は「我孫子市議会議員選挙勝利の集い」を開き、会場いっぱい約70名以上が参加しました。

先ず、日本共産党千葉県委員会の中嶋誠副委員長が激励の挨拶をしました。中嶋さんは最近の情勢について、国会では岸田政権が自民、公明、維新、国民民主の各政党と一緒にあって、大軍拡関連法やマイナンバー改正法、原発推進5法などを次々に成立させてきたが、どの法案も国民のためにならない悪法であることをズバリ指摘しました。そして憲法と暮らしを守り、取り沙汰される総選挙と我孫子市議選を勝利するためには党を大きくすることがどうしても必要

であることを訴えました。続いて、次の我孫子市議選で立候補する二人の予定候補者が紹介されました。一人は5期目に挑戦される現職の岩井康さんです。岩井さんは暮らしやすい我孫子を実現するためにやり残したことがあるので来期も力いっぱい頑張りたいと表明しました。

もう一人は新人として挑戦する船橋まさるさんです。船橋さんは現職の野村さんが体調のこともありそのバトンを受けましたと述べました。その重い決意を淡々と話す船橋さんに沈着冷静な人柄を見る思いがしました。船橋さんは自分が日本共産党に入党したのは日本を戦争をしない国にしたいこと、そして弱い人の味方になるためだったと述べました。

そして人生は一回きりであり、より良い明日を作るために皆さんと一緒に力を合わせて頑張って生きたいと決意を述べて、参加者も大きな拍手で応えました。最後に、船橋さんの選挙区域である中峠台、我孫子駅の南北地域、天王台など、そして岩井康さんの選挙区域である布佐な

どの党支部や後援会から、船橋まさるさんと岩井康さんを何としても当選させましようという力強い発言があり、熱気あふれる集会となりました。(井)

6月議会報告

- ① 2019年の「くらしのアンケート」では「生活が苦しくなった」が57%でしたが今回は73%と急増しています。全市民を対象にした生活支援が必要として、国・県頼みでなく市独自の政策を求めます。
- ② 防災対策について 具体的な回答なし。
- ③ 防災無線が室内では聞こえず、スイッチを入れないと防災情報が聞ける防災ラジオを要とありますが…。

- ④ 我孫子駅南口のタクシー乗場の段差を無くしてほしい。
- ⑤ 天王台駅東口を含め今年度着手する予定です。
- ⑥ 356号のこれからの取り組みについて聞きました。
- ⑦ 柏土木事務所へ申し入れする中で協力していきます。
- ⑧ 国や県と共同で一日も早く安全安心な我孫子になるようお願いいたします。(市議会議員 野村貞夫)

今年は大東震災100周年の年である。1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災は死者9万1300人、家屋の焼失・全壊46万5000戸という大災害をもたらした(『近代日本総合年表』岩波書店)▼震災時住民の混乱、暴動化を防ぐという名目で東京府、千葉県など南関東4府県に戒厳令が布かれた。災害による大混乱のさなか、朝鮮人暴動のデマ・流言が広がり、不安にさいなまれた住民、自警団、軍人などによって数千人の朝鮮人が殺害された。殺害された朝鮮人などの犠牲者数は不明だが、政治学者吉野作造は2613人という数を、朝鮮の「独立新聞」の調査は6661人という数字を上げています。いずれにしても数千の朝鮮人などが殺されたのである▼千葉県でも八千代市、船橋市などで230人の犠牲者があったとされ、我孫子市でも3人の犠牲者が出ている。朝鮮人殺害の状況を描いた絵巻(「関東大震災絵巻」)が最近発見され、7月5日から東京新宿の高麗博物館で公開されるという▼さらに、社会主義者、労働運動家なども軍人によって殺害された。南葛労働組合の川合義虎ら10人が殺害され(亀戸事件)、大杉梁夫妻ら3人も殺された(甘粕事件)▼10年前、天皇制軍国主義下の日本では、大震災の混乱状態の中でこのような非道が行われた。こうした歴史を決して繰り返してはならない。関東大震災100周年の今、強く思う。(竹)

花火

今年は大東震災100周年の年である。1923(大正12)年9月1日に発生した関東大震災は死者9万1300人、家屋の焼失・全壊46万5000戸という大災害をもたらした(『近代日本総合年表』岩波書店)▼震災時住民の混乱、暴動化を防ぐという名目で東京府、千葉県など南関東4府県に戒厳令が布かれた。災害による大混乱のさなか、朝鮮人暴動のデマ・流言が広がり、不安にさいなまれた住民、自警団、軍人などによって数千人の朝鮮人が殺害された。殺害された朝鮮人などの犠牲者数は不明だが、政治学者吉野作造は2613人という数を、朝鮮の「独立新聞」の調査は6661人という数字を上げています。いずれにしても数千の朝鮮人などが殺されたのである▼千葉県でも八千代市、船橋市などで230人の犠牲者があったとされ、我孫子市でも3人の犠牲者が出ている。朝鮮人殺害の状況を描いた絵巻(「関東大震災絵巻」)が最近発見され、7月5日から東京新宿の高麗博物館で公開されるという▼さらに、社会主義者、労働運動家なども軍人によって殺害された。南葛労働組合の川合義虎ら10人が殺害され(亀戸事件)、大杉梁夫妻ら3人も殺された(甘粕事件)▼10年前、天皇制軍国主義下の日本では、大震災の混乱状態の中でこのような非道が行われた。こうした歴史を決して繰り返してはならない。関東大震災100周年の今、強く思う。(竹)

渡辺藤正市長のこと（上）

吉松千草

（渡辺藤正さんについて、元市議会議員の吉松千草さんに寄稿をお願いしました。編集部）

東京都に美濃部都政が誕生し、多くの革新自治体が誕生した1970年代、保守王国千葉県の中で、1971年に初めて渡辺藤正民主市政が誕生しました。私たちは革新市政とは言わず民主市政と言ってきました。

何故なら最初の一期目の選挙母体は社会党、日立精機をはじめとする労働組合、保守系議員、手賀沼競艇場誘致反対で活動した市民団体、自民

渡辺市長と吉松議員



党の県議もはいつていました。我孫子町で共産党初めての町議となった関根平治さんはじめ、当時の共産党は、この反対運動の中で力いっぱい頑張り大きな力を発揮しました。関根議員はよく「リュックにピラをいっぱい詰めて毎日のように我孫子の町中に配って歩いた」と話されています。

しかし、一期目の選挙では、選挙の政策協定は困難でしたが、自主的に応援しました。そして手賀沼ボートレース誘致反対運動を戦った保守系議員の方々、労働組合、市民、共産党、社会党は、この反対運動に参加し、町の副議長を務めていた渡辺藤正氏を市長に押し立てたのです。まさに手賀沼の自然環境を守る運動の中で藤正市長は誕生したのです。

私は藤正市長の初めての選挙と同時に戦われた市議選補欠選挙に立候補しました。選挙カーで出会い、手を振ったのを思い出します。私はこの選挙では落選しましたが、その年の秋に行われた市議選で

は5位で当選しました。さっそく団地に入居して保育園がなく困っているお母さん方と一緒に猛烈に運動を始めました。

「てめーのひりだしした子を市で預かれというのか」と言っただりゴリの保守議員の言葉は忘れません。しかし藤正市長は、さっそく市の保育園が完成するまでの間、自主保育園の場所に、反対がある中、公団と交渉して3つある集会所の一つを借りてくださるなど、皆さんの声をよく聞く方だと思えました。

また市の職員に対しても公平でした。そのころ多くの町では、首長が変わると、その首長の下で役職についていた人を外に飛ばすなどが行われていたそ

うですが、渡辺市長はそんなことは一切せず、公平に処遇したのです。職員の方は明るく活気がありました。ある職員が私に

「藤正さんは偉いよ、職員の採用でも、どんな方の推薦があっても、一定の点数に達していない人は、ぼっさり切り捨て、コネなしで優秀な職員を採用する」というのです。それは当然なことでは、という、そんなことではないと言われました。

職員採用やいろいろな事業を進める中で収賄事件が起きますが、渡辺市長は本当に清潔な方でした。

（続く）



蝶 ベニシジミ
柴崎の鈴木さん撮影

寄稿 我孫子に暮らす(1)

小原 紘
(我孫子2丁目在住)

我孫子で暮らし始めてから17年目。これまで13回の引越しと2回の単身赴任。海外留学を加えると16回も住まいを変えてきた。勤めから解放され、「ホッ」として住み始めた我孫子。緑に恵まれ、交通の便がいいのが気に入った。東日本大震災、福島原発事

毎週金曜日に首相官邸前に出かけた。放射能測定器を片手につけてまわった日々。放医研の研究者が「放射能は安全」と言う市の説明会に不安を募らせた。手賀沼は放射能で汚染されたまま。山林の除染は放置された。放射能廃棄物は何処へ行ったのか。

今年、「いい所にお住まいですね」という添え書きのある年賀状をもらった。文人たちが愛した白樺派のふるさと。柳宗悦と妻兼子が住み、バーナード・リーチ窯があった。移り住んできた志賀直哉、武者小路実篤たち。三樹荘(旧宗悦邸)を訪れた濱田庄司や浅川巧兄弟。美しい手賀沼と彼らの交流を想像するだけでも興味は尽きない。

故で「引越し」が頭をかすめた。震災から12年があつというまに過ぎ、相変わらず我孫子に住み続けている。何処に住んでも同じという一種のあきらめと開き直りである。だが原発の「安全神話」の中で生きてきた自分を許していない。

そこへ大量の放射能が降り注いだ。中原中也の「汚れたちまった悲しみに」という詩がしきりに浮かんだ。感傷にふけり、失われた悲しみに浸っていたわけではない。震災以降、心が休まる日はなかった。どう生きるべきか、何ができるのか自問し続けた日々だった。戦争をしない国から戦争ができる国へ。脱原発から原発依存の国へ。大転換はもはや深刻さを通り過ぎた感がある。じっとしていられない。何かしなければ。(続く)